

日野江有馬氏転封の軌跡

荒瀆 茂

晴信の汚名を雪いだ苗孫たち

日野江有馬藩主有馬晴信が「岡本大八事件」に連坐して慶長十八年（一六一三）改易のうえ死を賜った事は人口に膾炙されているので割愛するが、嫡子直純が咎めもなく、むしろ加増され転封となっている事実疑問が生じた事が本稿を起すきっかけとなった。

そこで経緯を時系列的に簡記してみた。

一、直純、加増転封の背景

直純、加増のうえ転封となったのは直純の妻帯に鍵があった。直純は「関ヶ原役」直後の慶長五年（一六〇〇）冬、大阪の家康に父と共に伺候、そのまま家康の傍に近侍（体のいい人質）、その時直純十五歳、利発さが家康に気に入られたようである。家康が自分の養女として養育していた娘「国姫」を直純に娶せている。国姫は家康の股肱の臣「本多平八郎忠勝の嫡男忠政」の娘である。時に慶長十五年（一六〇五）のことだが「直純はすでに結婚していたが、国姫と結婚する為前妻は離別した」との説もある。なにはともあれ国姫との結婚が直純に陽の目を見ることとなったのは間違いない。実は国姫の母は「家康の長男で後年信長の命で切腹させられた信康の忘れ形見」で本多忠政に嫁いでいたもので家康の曾孫であり、目に入れても痛くない存在が国姫であった。その婿になった直純も憎からう筈はない。「肥前は耶穌多く治め易からざる故」をもつて一万三千石



延岡城石垣（荒瀆氏撮影）

加増の上、五万三千石で日向県（のちの延岡）に転封となったのだが、背景には家康の好意ある配慮が窺える。

二、直純の左遷転封の原因 山陰一揆

直純が日向国豊藩（有馬氏転封の後）は延岡藩となったので以後は延岡と改める）の初代藩主で、嫡男「大助」は元和二年（一六一五）家康の諱「一字を賜

り「康純」と名乗る。（これを偏諱という）直純が日野江から延岡に転封になった時、家臣団のなかには浪人、帰農する者が多く「国乗遺物抄」などでは「騎馬八拾騎、足軽三百人を云々」と数字を示しているがいずれにしても直純転封に従わなかった家臣が多かったのは事実のようである。

いわば「徳川禁令考の軍役人数」に満たない定員割れの状態で延岡に入部したようである。従って「直純」「康純」の代は家臣団の充実整備、藩政改革と城下町の整備に力を注がざるをえなかったようである。その結果「寛永年間（一六二四）の『分限帳』では「三二五人の武士団を抱えていることを示している。因みに大名の家中は「士分である侍」と「騎馬を許されない「徒士」の準武士格を指し、軽輩である足軽、中間は区別される。だが戦時下には軽輩や農民も組入れられるので実数は三倍四倍にも膨れるのが実情である。因みに『徳川禁令考』の「軍役」では「五万石の場合千人」を課している。

尚、初代直純は寛永十八年（一六四二）参勤の途上大阪で病死している。

三、三代清純 糸魚川に左遷

清純は父・康純が延宝七年（一六七九）六十六歳で致仕に伴い同年襲封した。その時、清純三十五歳まさに油の乗り切った壮年大名であった。しかし政治は家臣を信頼して任せっきりのようだったのか、それが落し穴になったようだ。「天和」「貞享」以降続いた飢饉は延岡領内の百姓に多大な打撃を与え、年貢未納の末、逃散する百姓一揆が散発的に発生、それでも郡代役人やそれに媚びる村役人の苛酷なまでの年貢取立に業を煮やした「山陰村（現東郷町）百姓男女一四二二人が村を放棄し隣領の高鍋領に逃散し逃げ込み、延岡領の悪政十二項目を挙げ嘆願書を提出している。郡代や村役人の実名を挙げた嘆願書の作成に関係したのが、「被官百姓」といわれた、かつては有馬家に仕えていて罪を得て山陰村に居着した武士等であった。史料を深読みすると「藩内の派閥争いで被官百姓」

風信

○長崎くんちも、中秋の名月も終りました。

○長崎の名月と言えば諏訪公園内に「月見茶屋」があり、月見団子の「ボタもち」もある。「ボタもち」とは、古賀十二郎氏の解説によると東インド語でボタ（bhatta buda）は米の事であると言われる。長崎の唄に「おスワのボタ餅あじやよかろ」とある。「べたもち」と言う人もいる。

○最近は何故か、各方面より本会への問い合わせが多い。

其の一つ（問）長崎には石橋や石だたみ、大きな石造りの墓が多いようですが其の石材はどこにあったのですか。

○答、その参考資料としては布袋厚先生著「長崎石物語」（長崎文献社刊）を先ずよまるとよい。昔より長崎周辺の山には多くの良質の「長崎産の安山岩」があり、其れに応じた多くの石切場があった事と、一六二〇年頃より唐寺の建設が始り、多くの中国の石工達が渡来して来た事に起因していると言う。（問）次に、佐世保の方より「ゴマ豆腐」は長崎が日本最初の発祥の地ですか。

○答、正徳二年（一七二二）寺島良安の『和漢三才図会』の豆腐の項には「ゴマ豆腐はないが、一八〇〇年頃の『豆腐百珍』には「ゴマ豆腐のことが記してあり、足立敬亭著の料理編には「胡麻豆腐と胡麻よせの二種があり、「胡麻豆腐は砂糖、塩を加う」とある。この甘い「長崎ゴマとうふ」は、多分一八〇〇年前後に長崎に来航してきた唐船の人達によって伝えられた物と私は考えてみた。

○今月ご寄贈いただいた書冊

一、吉良史朗先生より『近世後期 長崎和歌撰集集成』（雅俗研究叢書2）本文一は瓊浦集（中島広足編）玉園長歌集（青木永章詠）夜雨菴集（近藤光輔詠）。解説・近世後期の長崎歌壇の四編。

幕末の長崎三歌人の作歌には長崎という土地柄よりあらわれたきわめて特徴的な歌である事等が論考され、今後の長崎歌史研究の上には是非一読しておかねばならぬ参考資料であった。（九州大学文学部川平研究室「雅俗の会」発行）

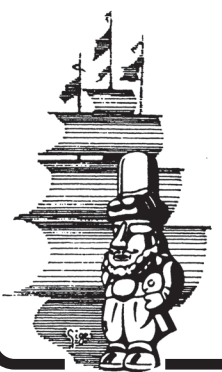
一、本会の古屋陸夫氏より、古屋氏が『九州文学第三十一号』に発表された「ハルピンの空の下」。古屋氏は小学校一年のとき、昭和十九年八月ハルピンより父母につれられて佐世保の地に引き揚げてこられたそうである。その悲しい物語が語られている。涙して読ませて戴いた。

○十一月一日（日）午後一時半より長崎市立図書館

主催・第八回長崎学講座（講師・越中哲也）あり、出席希望者は座席の都合上、同図書館までお申し込み下さいとの事（無料）

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一 一五四〇
十八銀行公会堂前出張所 2F



カット 中村 繁勝 なんばんえびす

となった帰農武士が、裏で工作し、それが一揆となって暴発したのが実情のようで「山陰一揆」と呼ばれている。結局は幕府の介入を誘うこととなり清純は元禄四年（一六九二）「政道不行届の廉」で越後国糸魚川に左遷となつてゐる。百姓一揆は領主を左遷に追い込んだとして一揆関係者十四名も死罪遠島の処分をうけ終結している。

四、糸魚川から丸岡へ 晴信の汚名を雪いだ苗孫たち

清純は越後国糸魚川に元禄五年二月家老らを送り土地柄を調査、その結果糸魚川は領土が狭く寒冷の地のうえ財政的に厳しい状況にあることを知らされた。清純は、その時目を見瞠るような果敢な措置を採っている。元禄五年（一六九二）六月十九日、九艘の舟で延岡を出発したのを始め九回に亘つて移動を開始したが途中で資金不足が生じ中断、元禄六年（一六九三）四月糸魚川に先着していた藩主清純は延岡に残っていた家臣に「触れ状」を送った。現訳し簡記すると

糸魚川は大変なところで先着した家臣は苦勞している。日向に残りたい者は無理して来なくても良い。

その意味は体の良い希望退職募集である。事実三〇八人の退職者を出している。しかしその内訳を見ると「康純が延岡時代に新規召抱えた者で、延岡に土着して田畑を所有し、永の暇となつても路頭に迷う者でない者が多く、日野江以来の譜代の臣は外している」ことが判り清純の心労の程が窺える。然し、その人員整理も元禄八年（一六九五）には「武士三二二人足輕中間五六五人」が康純の延岡初期の頃に戻っている。ともあれ清純は糸魚川で「無城主大名」の立場に甘んじていたが、元禄八年（一六九五）、越前丸岡（福井県上田市丸岡町）に転封となり、待望の「城持大名」に復帰し七年後の元禄十五年（一七〇二）十二月二十九日五十九歳で死去している。その後の丸岡有馬氏は、「一準」孝純―允純―菅純―徳純―温純―道純と八代、一七七年間続き丸岡で維新を迎えている。

なかでも二代・一準の頃より譜代大名に準じ「帝鑑の間詰め」となり五代菅純は二十三歳の若さで「奏者番・寺社奉行・若年寄」と累進。最後の八代道純は老中に登用されるなど、幕閣に地位を進め、晴信の汚名を完全に雪いだと言えるようである。（全国歴史研本部運営委員・本会公会員）

【引用文献】
『寛政重修諸家譜』『徳川加除封録』『戦国人名事典』『国乗遺聞』『藩主総覧』
『宮崎県史近世編通史』『新潟県史近世編通史』